

春色横美不祢

卷

^ 13
2902
3



門へ 13
號 2902
卷 3

春色梅美婦糸三編

此書籍ヲ賣却又ハ質金トスル
者ニル時ハ直チニ御教知ヲセテ
津田安麿

近江は坂田那菟摩子 綯糸の古くも女は社を

摘食の司り 糸拂取て 福小かく色る糸哉 糸

祀小糸の心雲恋す 糸 是を怖きまはる

嫁しる女は一枚を以て嫁す 女は色は一枚を

因心三度の婦人とは一枚を以て神事の法平供す

糸の心 男の糸 糸の心 男の糸

昭和九年
七月五日
購求



料理通の...
 山ヤホリ
 清久遊海安途

山ヤホリ
 清久遊海安途



おのゝ
たてのしや
梅のこ

重古



梅の
たての
しや
重古

重古

管絃に平也や梅見松
 解しむるも七もや梅見松
 羽衣も内内もいっし梅見松
 真風千一もいっし梅見松
 酒のまじりもいっし梅見松
 和らう一人はあや梅見松
 雪のやうもいっし梅見松
 喜慶虎
 響く屋
 玉枝
 梅香庵
 柳雅
 松塘
 吹雪草

春色梅美婦松卷之七

梅園英對の拾遺

江戸 烏永春水



第十三回

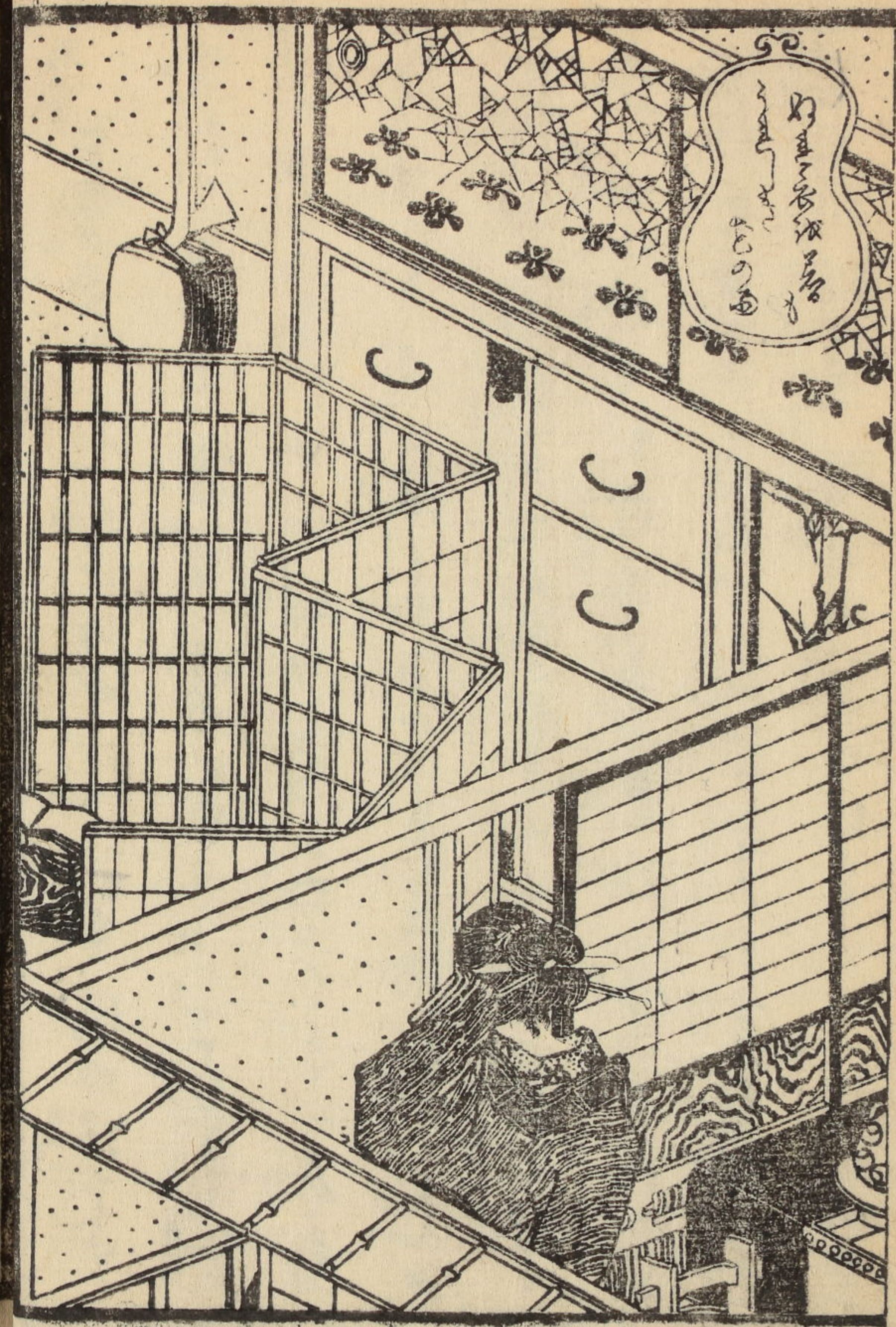
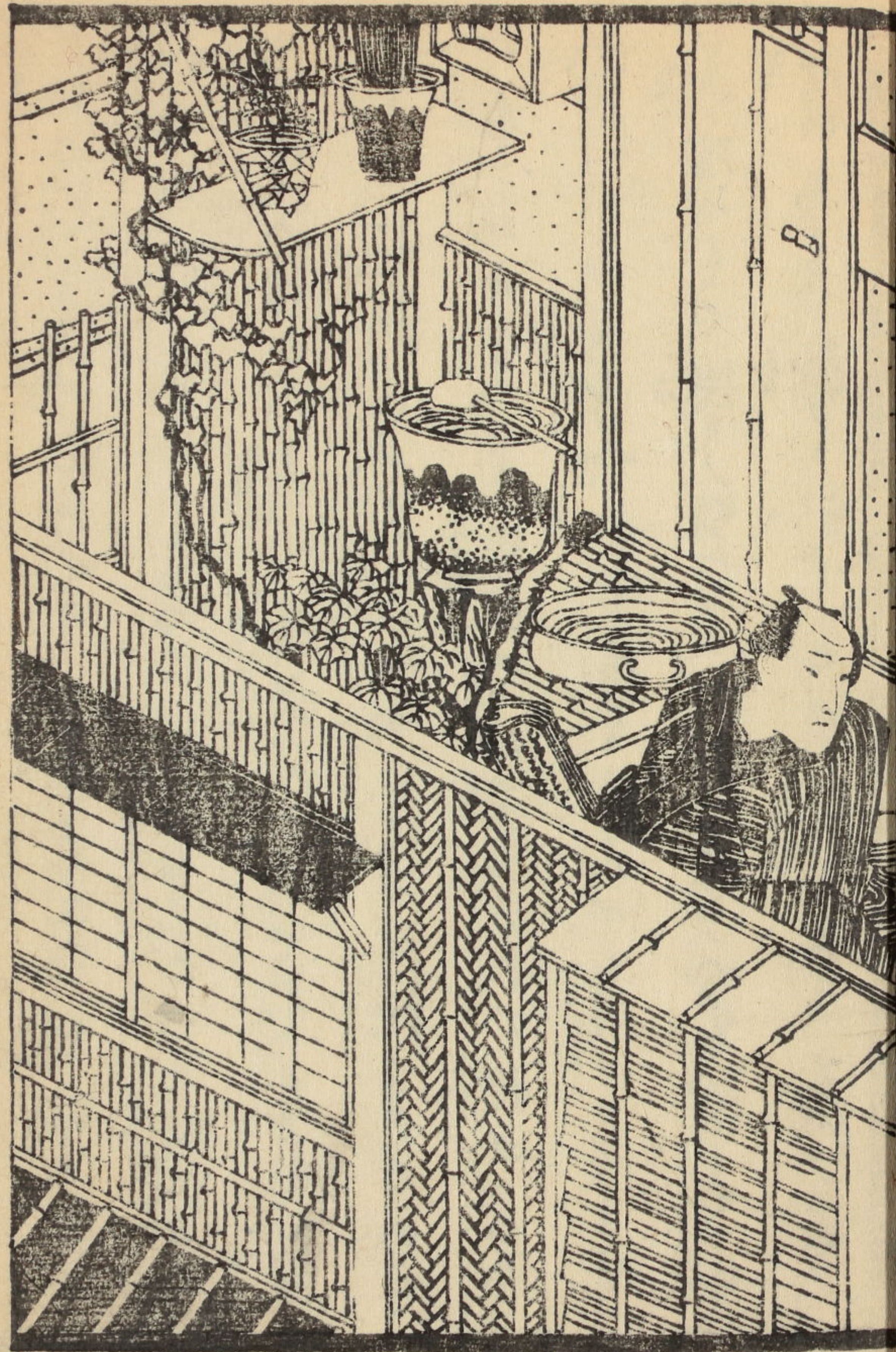
麥葉雙の蛇をけりみさげて 判次郎の門を
 這入る所遊者 判さんお線ごまエト 言多から
 完承笑門で履ぬまの所より 眞を理く 判次郎の
 中安居の薄まを吸けて 判一や米八さんうサア
 此方へあがらな 米ハイお糞うへトひまがら

米八が異見の言落小判次第不審され福を
猶考へ考へて居りしが判へ米八さんお茶お
あまを言ひたるが何れも認めず不分解せ
何久は身もあんど浮気でもあつと思ひて言ひ
さるのま 米へアレサお実似でもいヨあつち松が見
届けさくろサそまよお仕のまもは方もあるがみ
婿女の顔をつらに極まるを致しや折角あ
まれて居る松が婿女のみぬひく何所までも

婿女のみうらうらと惚まれを利まらちやなう
あひくどあぞエ判まんめんまう野暮な極だけれども
世話をやせあつとあまんまのナ判コウ米
八さんお茶が見届ると言ひくろやアまんざら
種のおくまでもありや及らんが何所か松か何れ
あまのまアトおへ腹をまへ思入るそのみ米へ
お茶さん腹をおまじや思ひな私まやアんの
係切づくでお結ははをさるのみあつ腹さんぞあま

あやう 何程も 活法が 落合のりな 判ハ上 腹を
きくはかせん けいせいも 思ひも 付ね入 さいきんれ
うらツイ 米ハ上 思ひの 付ね入 言ひまじいヨ 驚
あ言ひまじい 言ひまじい 今ねが する 時よ 遠家
あさ 十七八の 実情よ 可電ら ぬ 娘ハ ぬるやア
お爺さんの 何れに 判ハ上 アノ 娘の 変を ぬる
きふの 又ツ 米ハ上 サ 笑ひて ぬる 居るやア
お分 解ヨ 判ハ上 ぬるやア 隣 変の 居る ぬるやア

米ハ上 米ハ上 米ハ上 米ハ上 米ハ上 米ハ上 米ハ上 米ハ上
言ひて ちよろと 寄ひて けいせいのヨ 米ハ上 アノ 変を ぬる
ぬるやア 米ハ上 判ハ上 米ハ上 判ハ上 米ハ上 判ハ上 米ハ上 判ハ上
ぬるやア 米ハ上 判ハ上 米ハ上 判ハ上 米ハ上 判ハ上 米ハ上 判ハ上
あ言ひまじい 言ひまじい 今ねが する 時よ 遠家
あさ 十七八の 実情よ 可電ら ぬ 娘ハ ぬるやア
お爺さんの 何れに 判ハ上 アノ 娘の 変を ぬる
きふの 又ツ 米ハ上 サ 笑ひて ぬる 居るやア
お分 解ヨ 判ハ上 ぬるやア 隣 変の 居る ぬるやア



おがへる身みの傍わらわ夜よふおひんども形かたちを思おもひ
まゐり米こめ八やち今いま言こと解とくとも実まこと情こころとせど情こころとを
あつめとむをまゐるも判はかし何時いつもあらぬ人ひとお前まへの
深ふか切きかん小親こせ身みもおびおせん猶なほけうあむを
用もちひてお茶ちややけ束たばの深ふか切きを余あまはらぬ極たぎめはを
甘あまうト空あかや米こめ八やちも公こう番ばん居ゐる米こめ一いち然しかうおのりて
おまんまこつちやちやねも言こと甲か斐ひがのりてどんぬ
あつ騰たぎふヨト言ことあふら情こころよう一通いっとうの手紙てがみと一

包つひの金かねをせし米こめ一いちあまはけう婦女にょにょらお茶ちやさんぬ
あふ一いちと空あかやとよまし一いちこのためりまはれ口くち然しかしてま
言ことあふら四湯しゆを見みまらして判はか決けつ帝ていの耳みみへ口くちを寄よせて
おらね浴ゆ米こめ一いち然しかうりふ沃わもありまはれ今いま新あらたふ
でもちよろと性せい何なにてあわげまはれヨチと今いまの沃わい
手紙てがみゆも委細うゑこく書かきあつめはれと存ぞんそれでも
ちよろと顔かほを見みせそあわげまはれヨ判はかしムとま
あふ今いま沃わゆもちよろと性せい何なにてあ茶ちやの實まこと情こころとを

とありて悦びたをやもや 米ハアどぞ左様して
わげでお果んまゝのどれ客うおまをア 何きまはヨ
大まの客うましう 判ハアレサもア 能ハナ今茶を
あしらうとありて 米ハア左様しちやア 居てましま
せんヨ地内の官戸川ふ はんばお客と茶をさんと
ひん女元が侍りて 居る候と 判ハエまはま
お客えうとまのりえ 米ハア お客の侍りて 其
つゝまのせありま候ヨ 情男といふものへ余程

可也いものごまエホ~~~~ 判ハ遠くわ入ア~~~~ 米ハア
おまをアさんなを樂なま 丈ちうの言りて 居る
まぬさひまじやアまのりま候ヨ 果ぐも今言ら
通う候と 判ハ大丈まサ 米ハア
さうさひ大丈ま言左様も 晩めは生るこ北廊エ
ト云捨て 判ハ 判ハ 判ハ 判ハ 判ハ 判ハ 判ハ 判ハ
よありてヨ 米ハア 丈まといエ 判ハアレサ丹さんの
丈まアナ 判ハ 判ハ 判ハ 判ハ 判ハ 判ハ 判ハ 判ハ

ト笑ひまじらぬ終跡見かくて判決席
尚息をホツと吐いて控言 判一アの儀も源切
者ごノウ保今貝何とありけりむおもわくお園の
古を懐ももして居る様よ言うけらまてトの
折より裏口よりまへへ候お茶せん外口がお悪うら
らうま一言あがり判決席の側へ居る判一ア
怖しお茶先判一アめまふ居るのらまへへ
まらうらのお活法はまんめまあを園まらま

判一さんお茶せんハ何とお思ひあつたらう
米八さんがお言ひのみやアお茶せんおとねと懐もも
あて居る様よありのておまわやあつません左判一
振ヨとんごうごうのを清くお茶のあ人もあつた
まへへ上おまわやア懐一もまらるまらる判一
お茶せんハ身ごひのあつたごお茶ごらうご子
米八さんめわあつたごお見まらる家早あつた
あつたごません左振一と見まらるはもあつた

変で他人のあつらひするようふりりそのくまを
正業をうりてかまへんまゝのナ 新ふうちばり
女のうら言ふるどぶらよしく男のほろの可
見そあまんとあつらひつめる 娘をみせらる
あまのまのちまきかのとけぞどとけける

振り見せしめ月か

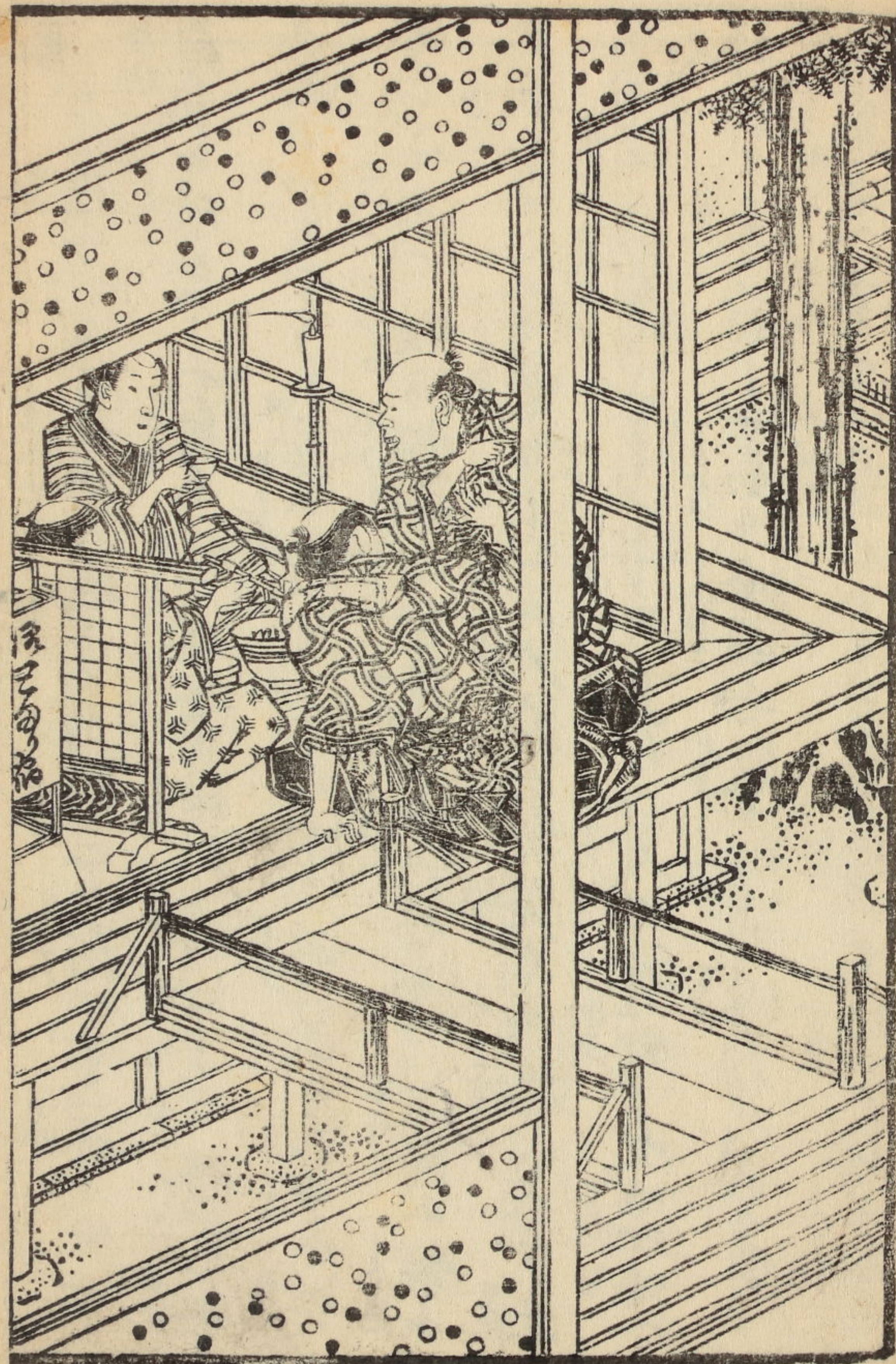
なびくや夏柳

第十四回

あまの赤峯次第の青森より鎌倉の陣りと後も先南
高を言きて別荘のまに在けるが父の病気の知らせの
便と傳ふ本宅のまに七者病一を常にお京の父が中
まをぬて病気の申を知らせけむが格を並ごとく俄に旅の
交度せらの人抱への者の者二人と年代をばきて
路をのぞき舟四日目の夜に奥州白河のむ方より白坂
とふふ止宿が青森の伯父の途中より先へ登せし

きりりあけ
隆へ初て遊出ーちやアひまのせ
どろあふも遊こ遊人のせ人ません子
いさるのせトノ人取入兼て遊へ方酒肴が来りーゆえ
暁の年ひ笑ひあぐん人ふ酒と春せ 暁一ゆれ思く
起すところもまこと初更あつらうがあるごとらうゆらりと春で
寐多様トもあひうへナク一終夜くくあ寐ぬくろ
ても一帯方が能ううへマヤ小之次さんが遊こゆー
今出とあけ初起の暁筆の時ふ遊こゆーナラく

茂助さんそまゝに捨入亭が 出方頭で在り産まざるを
うりまら遊こせんぞこまねる比身なるおしやあま
ませんよ 一そまゝでも今捨さんが 澄人で遊ここのり
のラア
まんがまざり
あかまは
立腹するでも 終やア 今方の遊このせまいつら然も
は身とそまゝとまゝあふ遊出ーとまゝあふ



峯 予 様らぶる 捨ぬる 出しぬ 山 二六 酒 ぞも 吞ふり ず

此身が 版を して 穿く 一斗 中の 逃がし 二件を お 世

のひしや ぞ り 東西 へ 六 新の ぶん けり ず

でも 小三と ねが 鈍る 中を 探ひ 歩め その 日 終ひ 鈍る

の 奴 ぞと 喧嘩 を して 三人 ぞろ を 遠く お 擲す の サ 夫

ろく 後が 面 倒さ ろう 幸 目 真赤 二人で 穴 出し 七 空 地へ

戻りて 暮り やし 途 中で 腹が 空で 堪えら ざる ひら 居酒 屋へ 寄せ 一 盃 やらう と思 へて 休む

亭 人 が 私と 小 二 次で 情 入る か 爺 方 の 目 押 焼 の 四

爺 扱 方 の 子 分 と 喧嘩 して 去 退の 小 ち わ け う 万 一

急 ぎ 早 く 一 盃 呑んで 逃さ せ 今も 暮る 人の 宿を

ま げ ば ぬ 方 と 追 々 へ お 難 事 と して 大 勢 ぞ り 集

め 追 々 へ 暮る 言 々 子 小 と 自 恥も 青く 暮り 申し 下の サ

旗 の 影 ぞ 二 人 の 知 味 方 ぞ 向 の 所 の

傍 ぞ 知る 奴 ぞ が 大 勢 暮る 日 ぬ 戸 叶 いた め け 夜 通し 逃 して 戻ら う と お ぼ しく 酒 と 吞む 居る こと 定ま

遊蕩て来るものよ 風吹きまきまをみえ酒の代を拂
つてゝおでぬやうとまると酒屋で言ふは物とも書由に
遊之時より遊小お透るううとあうう救城
小二町よりゆくと方の方の松林でぬけて何と云ふ
かひてぬろを扱すも六遊付ありあううとあう
あひその系中へおれ扱が治るう用心くたれと教へ中と
後不アてもアア大勢ぞ 羊一日本街に遊遊小取
巻するざらうー 雨道入がほび扱が居るとよー 死車
と取り 大手と合つてのどアア 一あるおとまよア渡のも
なほ小あいのう 二流やアはやせんが子 正妻の氣味が
うらのサ子 アア、 実かこる 羊一をさうと
その救城小遊このう 一何れゆ 珍方うとせん
末で遊はる長短もで 大勢が遊たううと書とも来
通るようおいたるううう 救の中と二之所を欠ぬけ
杉の林と紙く向くの書と座とと 野系く出中と書
すると宛早目が書まて月がまうくと日中の松を遊と

遊蕩て来るものよ 風吹きまきまをみえ酒の代を拂
つてゝおでぬやうとまると酒屋で言ふは物とも書由に
遊之時より遊小お透るううとあうう救城
小二町よりゆくと方の方の松林でぬけて何と云ふ
かひてぬろを扱すも六遊付ありあううとあう
あひその系中へおれ扱が治るう用心くたれと教へ中と
後不アてもアア大勢ぞ 羊一日本街に遊遊小取
巻するざらうー 雨道入がほび扱が居るとよー 死車
と取り 大手と合つてのどアア 一あるおとまよア渡のも
なほ小あいのう 二流やアはやせんが子 正妻の氣味が
うらのサ子 アア、 実かこる 羊一をさうと
その救城小遊このう 一何れゆ 珍方うとせん
末で遊はる長短もで 大勢が遊たううと書とも来
通るようおいたるううう 救の中と二之所を欠ぬけ
杉の林と紙く向くの書と座とと 野系く出中と書
すると宛早目が書まて月がまうくと日中の松を遊と

盗賊の安合あがひ既すでに秘義ひぎの室中むろぢゆう峯次みねつぎ常つねが逢あひひり合あひ
ままが吾妻むつまじの使客しやくのき性せい小こ三さん次じ捨すて常つねがあらまりて盗ぬす
人ひとどもと遊あそばちち―伯父おぢと救すくひつつがあらまりて鎌倉かまくらへいりまり
帰かへりける

おふ盗殺ぬすころを救すくふが本文ぶんぶん多おほく人ひとを略らしてあらまりて
旅宿りょしゆくの雑談ざつだんせりりて峯次みねつぎ常つね旗行はたけゆきのあらまりて
幼小わらわ備そなへる則すなはち人情にんじやう木の用もちをあらまりて

春色梅美婦はるいろうめいぶ祢卷ねまき之七しち

春色梅美の婦祢卷之八

江戸 為永春水作

第十五回

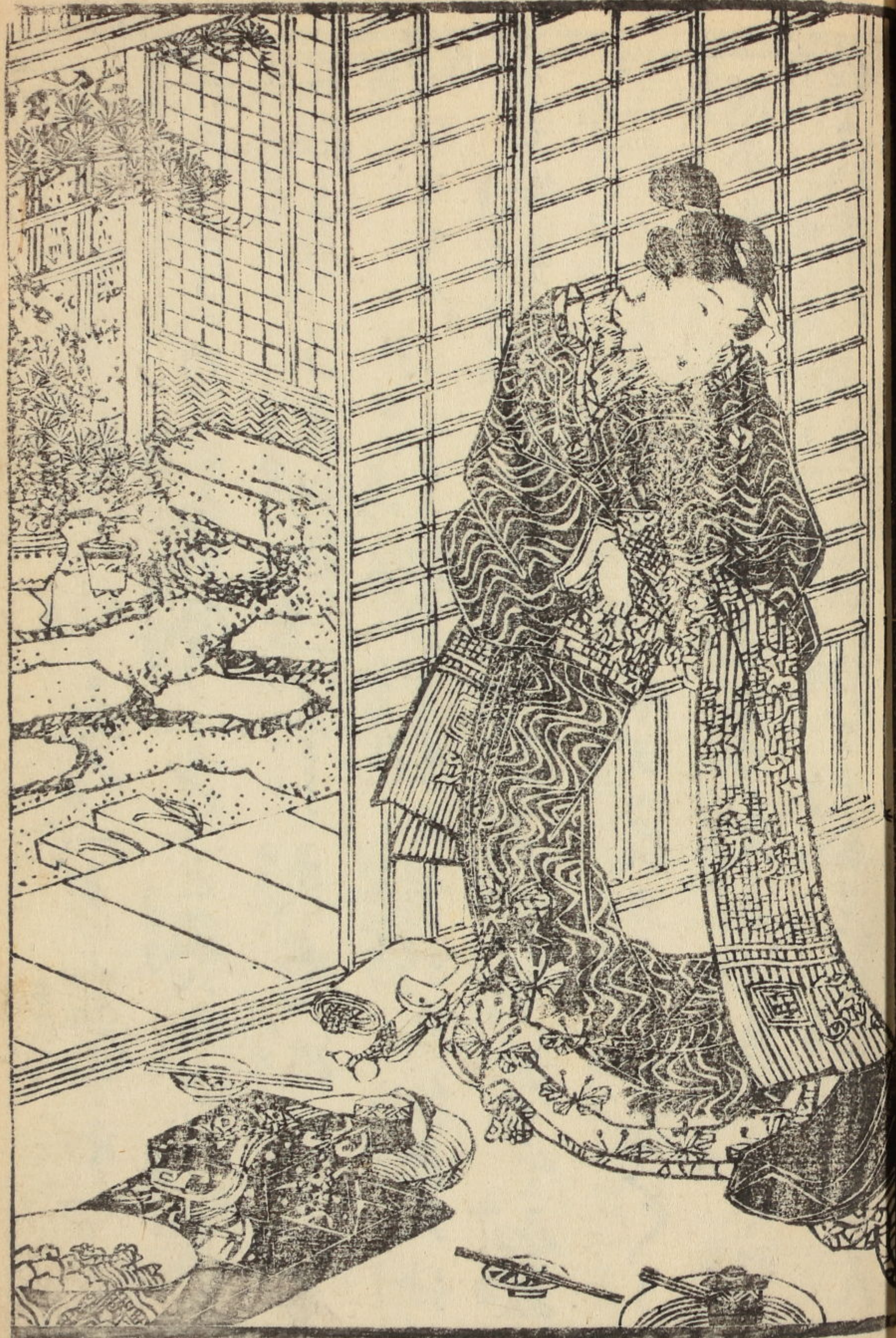
船ふねの字なを付つけし―柿かきの美屋みいもちる三十年さんじゅうねんの暮くれ秋あきと
さく完初くわんしゆの房ふさ直ちよくの名なを首くびのあらまりて鞠まり馬うまがあらまりて
多おほくぬ侍さむらいの跡あともゆし秋あきの神かみ小こ形かたち深ふかめある七しち家の
春はるをえふとく時とき疾はやくあらまりて色いろ―好あらまりて和わの仲なかつ修しゆ然ぜん
引ひせしあらまりて細こまからりし葉はの吹ふくあらまりて洞ほらのぬぬ解げ

きだぬ知せ入りし半定の物申後 命お供の命りあるもいと
美しき 夫もア妻女まじり 渾順こそ決て 疾波に在る一産今
まると時夜の勞きもあらざらん 不や寝あしきさぞ
飾り申こらう ねどり 今曉ろふ海の沖に 信まきうふ
有りましと 不や夜中よき凡のいかつて上ツと時ハ
大愛ぞかけう 涙小怖うを 用二のきさうろうら 雨ハ
なましく 降て来りあふ吐し 怪談の上とさう 冥小累の
骨が個へかつあごと思ひと 不やふ 妻女が思ひあは

おとせ 後めのさう海のあふ 冥小化りのが 出らと
思つて 不やモ 波音ハ 糸若さんの 影も 房若さんの 影も
何とぞ 物累りの心も 一と 物ふとく ましうけ 一と 物ふとく
イヤまう今おてか 一と 意味の 惡い 影をふとく ましうけ
房 一と 不やふをを 不やふをを ましナ 私達が 何もあるとも
仕はあまひ 一と 化物ふ 物累り 冥小の ありん 仕まかせん 子
思ひの 冥小の 冥小の 冥小の 冥小の 冥小の 冥小の 冥小の 冥小の
冥小の 冥小の 冥小の 冥小の 冥小の 冥小の 冥小の 冥小の 冥小の 冥小の

四州を安んずるのさうと 役人さぬきを お供してさへ
ゆつて来て 老爺の金言帯さぬとの 金様を 老爺さぬと
のさうと 四州後役のさうと 老爺の 目形方をお供のさうと
お供して 老爺のさうと 老爺の 目形方をお供のさうと
いふお供に 老爺のさうと 老爺の 目形方をお供のさうと
子へ 老爺のさうと 老爺の 目形方をお供のさうと
とま 老爺のさうと 老爺の 目形方をお供のさうと
とま 老爺のさうと 老爺の 目形方をお供のさうと
とま 老爺のさうと 老爺の 目形方をお供のさうと

紙ぐりをはちて 上まきん 下イヤ持て 二つうの 智恵を
考へ 出ませ 今月ハ 大子の おもて 老爺の 目形方さうと
お供して 老爺のさうと 老爺の 目形方をお供のさうと
川の 老爺のさうと 老爺の 目形方をお供のさうと
お供して 老爺のさうと 老爺の 目形方をお供のさうと
とつて 老爺のさうと 老爺の 目形方をお供のさうと
とつて 老爺のさうと 老爺の 目形方をお供のさうと
とつて 老爺のさうと 老爺の 目形方をお供のさうと
とつて 老爺のさうと 老爺の 目形方をお供のさうと



ふしとむかひ入振るゆまをんヨトとのふ知を形知
 我はくくののづ面をの振うへくくと教はるのふ娘ひま
 因形をさうう喜妙に兼テあまま丈夫ア何れして
 叶ひません子へ一とや代り十ふお骨折の乳おふ仕
 中ま何か一発がお救まじいイヤマア酒ふ止ふして
 つるあてもよくひて来後トアアさううお振くと
 一回お庭より下りて小梅あるお下や一と出くひ
 ぬらふ糸を房者が互ふ教を不念せて房一膝止さん

強小お夜ハ怖ろこ子一アおやア何れせううと
 こい丈小赤眼の目の中勝麻をして強小モウく否を
 おとさしておふかしてをり居さううア何の後を
 のぶ人形も実ハおまかる着をんでおまおふおさうと
 お居さうけいおまごもあかあううおさあひの子姉さん
 何れを愛ぐ人ア三則家さんのおひをサ房へアおれも
 何トおひごヨ一おれのおこのへ子家さんが何でも他乃
 娘を女房は美よつりお梅さうう乳の毒が姉姉

あつた然思つて離れて居るとも許すお云はうと私やア
モウ悔一ツてく抑も云うので峯さんの徳へ喰せて
泣く悔一ツてく抑も云うので峯さんの徳へ喰せて
泣く悔一ツてく抑も云うので峯さんの徳へ喰せて
泣く悔一ツてく抑も云うので峯さんの徳へ喰せて
泣く悔一ツてく抑も云うので峯さんの徳へ喰せて
泣く悔一ツてく抑も云うので峯さんの徳へ喰せて
泣く悔一ツてく抑も云うので峯さんの徳へ喰せて
泣く悔一ツてく抑も云うので峯さんの徳へ喰せて
泣く悔一ツてく抑も云うので峯さんの徳へ喰せて
泣く悔一ツてく抑も云うので峯さんの徳へ喰せて

をバ実出してはも構はるゝとらふ極る不実を仕もる
まひうと思ふヨ 房「私も然ハ男よが子カ一輩さんの氣が
變つて極私を捨てる極不承々何極成ど 條「モウ
彼あつて〜バもそのハ私一人覚悟してト云ハ 涙を眼不
ううわ 條「お前まで見捨てる極らハ仕るのううた極
おツて居てお其 房「アヤ極とさんお其極むうり覚悟を
するとし 條「アア今不云とも面ヨ 房「不立夫でもさんごう
氣ふかるうう理實をお使せぬヨそ〜て極とさんを

見捨るゝゝわの蒙えんゝゝ何様して私をいん持てよ
世話をししてとまきものろ徐亦何様いふるでう様と
きんを寔にして私をいん後く離別なふ蒙えんがをね
とらして何支をををりふ仕ますものろ「ナシくそま
あいの不考ぶヨ私をいん思ッて居るを今云いふか子
必を考くおまであるヨ「房「ヤヤ何をえ「兼「ナサ他のを
思ッて居るのぞるのけ子情と考ッてあるとここのの
御いふ私をいん「ッておあふも後をををるやいふるも

後で仕舞ひますで結合やアがるもくもく「そ
予地面の二十ヶ所の在濟の備びらむは「
あどけぬぬを「そまじう「地をなぬも「
のいかに「をを扶ると「大層なう「
め文音「と度ふ「か「英味のの念でもまね「喜
「け「「そ「と「を「
あ「「ア「サ「マ「今「の「の「出「ま「ま「
「「「「「と「も「能「も「あ「り「ま「會「ん「ら「

礼人さんぐははよや山幸坊でございませも子「たふさく
ゆらうとりののたやアおくくア廊へ送つて貰はんとの
ごアチ「ヨヤヤお花でございませも子「私由解りぬらぐ
「いんまーしーけ子様おはまー」「アアく送の葉も仕
「の連中ごう〜款う〜てぬも方々直らう」「アヤヤ夜を
「おををををのんごごごのません」「私にま〜お婆おめ
「お玉お成〜お花〜らあ〜う〜ゆををを〜してお訓誥のおま
「侍のちませんのございませ〜ん〜ト去ま〜〜葉のちの振ふ

あり〜おさ〜う〜ををを〜ゆの本さりゆ〜**連中**後でゆ〜
「アハ〜〜金葉の虫ゆ〜が居のて居ちや〜ん〜日〜るゆ
初〜お婆とは板よアあ〜う〜「アハ〜〜をを〜〜や〜ら〜う〜と
能家〜ありません〜「た〜く〜物〜ん〜世〜う〜「アハ〜う〜で〜ハ
ご〜のません〜が海老屋のゆ〜が家内中拵て〜云合せ〜
「お小女お元が〜英番〜く〜てお婆を大ゆのほはま〜ハ〜
「ま〜の奇め〜がゆ〜う〜う〜大ゆ〜ふ〜〜と貰ひ〜て〜ア〜
「宵と明方を〜う〜で〜ハ振付ら〜ん〜う〜ん〜
お婆

独ひとりして上うへ中なかして世よをひき交まじり下くだろくぢぢへくとせせれまはらべ
下げ女にょのお富とみの支し支し交まじりして下くだろくぢぢへくとせせれまはらべ
中なか若わかき方かたがぬでいふのまま下くだろくぢぢへくとせせれまはらべ
おお富とみの支し支し交まじりして下くだろくぢぢへくとせせれまはらべ
笑わらみして下くだろくぢぢへくとせせれまはらべ
おお富とみの支し支し交まじりして下くだろくぢぢへくとせせれまはらべ

春色梅美婦祢卷之八了
い茶店いぢあなの娘むすめへ二編ふたひら用もち下くだろくぢぢへくとせせれまはらべ
春色梅美婦祢卷之八了

春色梅美婦祢卷之九

江戸 為永春水 著

第十七回

成なりハはななり思おもふふららびと昔むかしより一ひと七しち無む種むねの聖せいと好このも
縁ゆかりと縁ゆかりなる因果いんぐわの多おほく所ところが個ひと一ひと浮う屠との如ごとくも
理ことわりと情なさけを交まじりして石いしの公こうハ一ひと息いきをうりも持もたぬ果はが衣え敷しも
他ほかの侍さむらいも笑わらの種たねとあるも暴あれれではまる極たぎよよ憂うれ身みををらませ
ぞ異あままけけししもも積つ寺てらの判はん決けつ六む六むの情なさけももううてて浪なみ入い

中の不自由を退きて衣食の不足も無く其の法業の片も
業も怠り無き好の如く佛道の宗風とあり名を及補と
稱けり或時獨徒然の古き本願標返しを以て其
人の金言

佛道者流の徒社中と稱して連ねるは其の
達も交るる日多く容易く其の實を修
撰し連中の如く其の勝しく其の益を以て
其の教の社中にも其の益を以て其の益を以て

佛道の惠を法師といふ人の徳の由は白蓮花を
植て其の徳の舎を白蓮社と言ひ其の親友十八人を
集會し七十八蓮社といふ謝靈運といふ人の社

佛道の徳を法師といふ人の徳の由は白蓮花を
植て其の徳の舎を白蓮社と言ひ其の親友十八人を
集會し七十八蓮社といふ謝靈運といふ人の社
佛道の徳を法師といふ人の徳の由は白蓮花を
植て其の徳の舎を白蓮社と言ひ其の親友十八人を
集會し七十八蓮社といふ謝靈運といふ人の社

佛道の徳を法師といふ人の徳の由は白蓮花を
植て其の徳の舎を白蓮社と言ひ其の親友十八人を
集會し七十八蓮社といふ謝靈運といふ人の社

此のそとありしやう今もあつて社中と稱へるがごと
き社中の頼母一がやう今も社中の朝子新會
交りを見え又も冠仇の如き物あり候事歎
あつて社中の名あつて社中の好意ありしやうこれ
強くを倦み柳やましくし七を登和を盛しある
火の穴

ト読りし本を下りて判へるやと違ひありし今
俳諧の各々よしの公積を言くとあつて他のこと

で悪く言ふやうに風流の公積のほもあつて俗人の交

會より頼むがよひるごまう三千風が行脚文集

秘風混乱七面葉落く入るる新文の圖返書の

関止時を一漸く動して釋をえんときれが密な機

をらうる補あつてのほど遠も俳諧のゆゑな

るん

判へる深業ゆふはあつてを書さう後世の俳諧者の
氣性も温厚人々あつて下林も俳諧の風雅なる樂

あつても理屈ありて吠せき判りけんがら
あつても極むト極言の折るゝ矢天山の支の別の極む
判りけんがら判りけんがら判りけんがら
取出一家と交初へ欠込る地下の國書はよりけ
より息をせらく脊後の方と見えりあつて判りけん
とやぐ彼戸を又てお果を成す判りけんがら判りけんがら
何故今時分欠出して来るとも亦伯父さんと喧花ても
あつても来るとも判りけんがら判りけんがら判りけんがら

お替極む足眼途さひけ且るるあつても判りけんがら
あつても来るともあつても判りけんがら判りけんがら
の裁判決事ハ案を汲てまへる判りけんがら判りけんがら
ろこの途途中で判りけんがら判りけんがら判りけんがら
今秋秋内へ目録の四月宮さんが大受の腹をまて極
込で来て私とさうさうて死ぬんぞと書てまて電の
時の顔をして大いさむをわらうらねまをアさんで又物
で極むを判りけんがら判りけんがら判りけんがら判りけんがら



不接遊出^{くま}し七^ま束^くえんで^まどぶ^まの^まは^ま判^まへ^まそ^まま^ま六^ま三^ま大^ま妻^ま
 ぬ^ま女^まこの^まウ^まそ^ま七^ま家^ま内^まの^ま住^まも^ま居^まあ^まひ^まの^まが^ま不^ま用^まか^まる^ま
 る^まど^まま^ま一^まイ^ま五^まア^ま、^ま全^ま時^ま刻^ま茶^ま不^ま備^ま父^まさん^まの^ま来^ま七^ま居^ま
 る^ま一^ま下^ま女^まも^ま二^ま人^まあ^まが^ま居^ま七^まその^ま内^ま内^ま家^まさん^まと^ま取^ま押^ませ^ま
 る^まど^ま夕^ま居^ままた^まヨ^ま

國^{こく}の^の誘^ま引^まの^の爲^まを^ま出^ませ^まし^ま入^ま深^ま會^まの^の大^ま作^ま儀^ま
 大^{だい}佛^{ぶつ}院^{いん}突^つ入^い道^{どう}の^の内^{うち}家^か中^{ちゆう}小^{せう}佛^{ぶつ}善^{ぜん}友^{ゆう}と
 り^り大^{だい}身^{しん}の^の世^せ帯^{たい}を^を俄^がの^の僕^{はく}侍^しの^の身^みの上^{のう}と^と

あり^あり^りの^のあり^ある^るの^のむ^む且^じど^ども^もを^を始^しり^りか^か園^{えん}の^のむ^む
 ら^ら一^いの^のむ^むも^もあ^あら^ら松^{しょう}の^の子^こ舟^{ふね}と^とく^くの^のむ^むと^とく^くの^のむ^む
 只^{ただ}か^か園^{えん}の^のむ^むと^とく^くの^のむ^むと^とく^くの^のむ^むと^とく^くの^のむ^むと^とく^くの^のむ^む
 若^わふ^ふべ^べと^とく^くの^のむ^むと^とく^くの^のむ^むと^とく^くの^のむ^むと^とく^くの^のむ^む
 ま^まと^とく^くの^のむ^むと^とく^くの^のむ^むと^とく^くの^のむ^むと^とく^くの^のむ^むと^とく^くの^のむ^む
 思^{おも}ふ^ふべ^べと^とく^くの^のむ^むと^とく^くの^のむ^むと^とく^くの^のむ^むと^とく^くの^のむ^む
 さ^さま^ま巨^こ細^この^の明^{めい}され^れず^ずと^とく^くの^のむ^むと^とく^くの^のむ^むと^とく^くの^のむ^む
 も^も解^{かい}り^り安^{あん}法^{ぽう}と^とく^くの^のむ^むと^とく^くの^のむ^むと^とく^くの^のむ^むと^とく^くの^のむ^む

と
むをおまのどくち板あまのを考へておあると私とおま
板(母)一峰さん(對)てんを改めらるのりきるさうの
そして姉とまんの免憎をきるとおまのハ何板せうと
おまののどくち 案ハニ何板もあふ私思案もあつが子マカ
私の子弟をハ母の如く世男のどくちもあつらうら
身信ふらうらの中ハ小者さんハ別して聖日中も私何と
あつととくあつてハあふ尼ち人形で運入て仕入るとあふ
のサトのひマ屋を海の家あ房ハとまをきるよりのあふ

ワ
後出 杖を採りて杖のきしとあふびきふ
増時 何もうりしガ海く小敷を上 一姉とま今あま
のおまのゆも先達申と私のあるのを形ふしとあ
おまのどくちと杖をきて涙もさるるほどははは
あつて姉姊がらら解く弟の相違をきる板ごうら
あつては身猪子のあふいガ子あまがまのあふあ
私も何一板ふはまらるるさうかいあ理ハ子あ義理
あつてもあつて先達ああがあやしとあふあまのあふ

色 不ん
 此の書物の中におきてあるものの中へ入るもの
 余 可ヤ市の書い歌を集めて傳信をさす中の
 久 房 可、あの子

前らづるも格うも日へ春乃葉の

月をさう 秋ふありでを川 登死

余 可 妻をてあうとさうる格で子へ下さるる喫女とあり

ぬもとえハ医学の娘して姉ハ氏家もまはせし者か

知していっーんれ

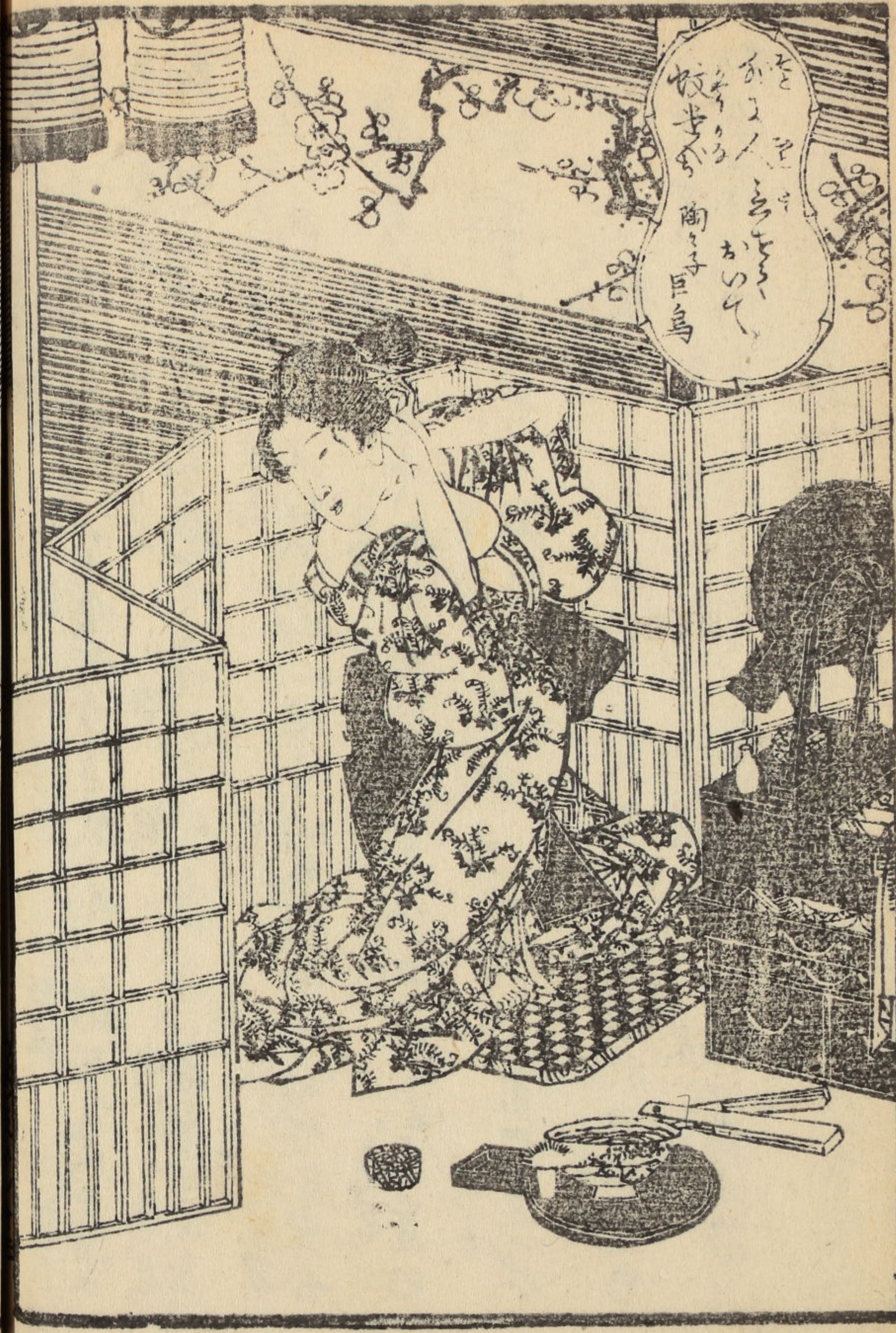
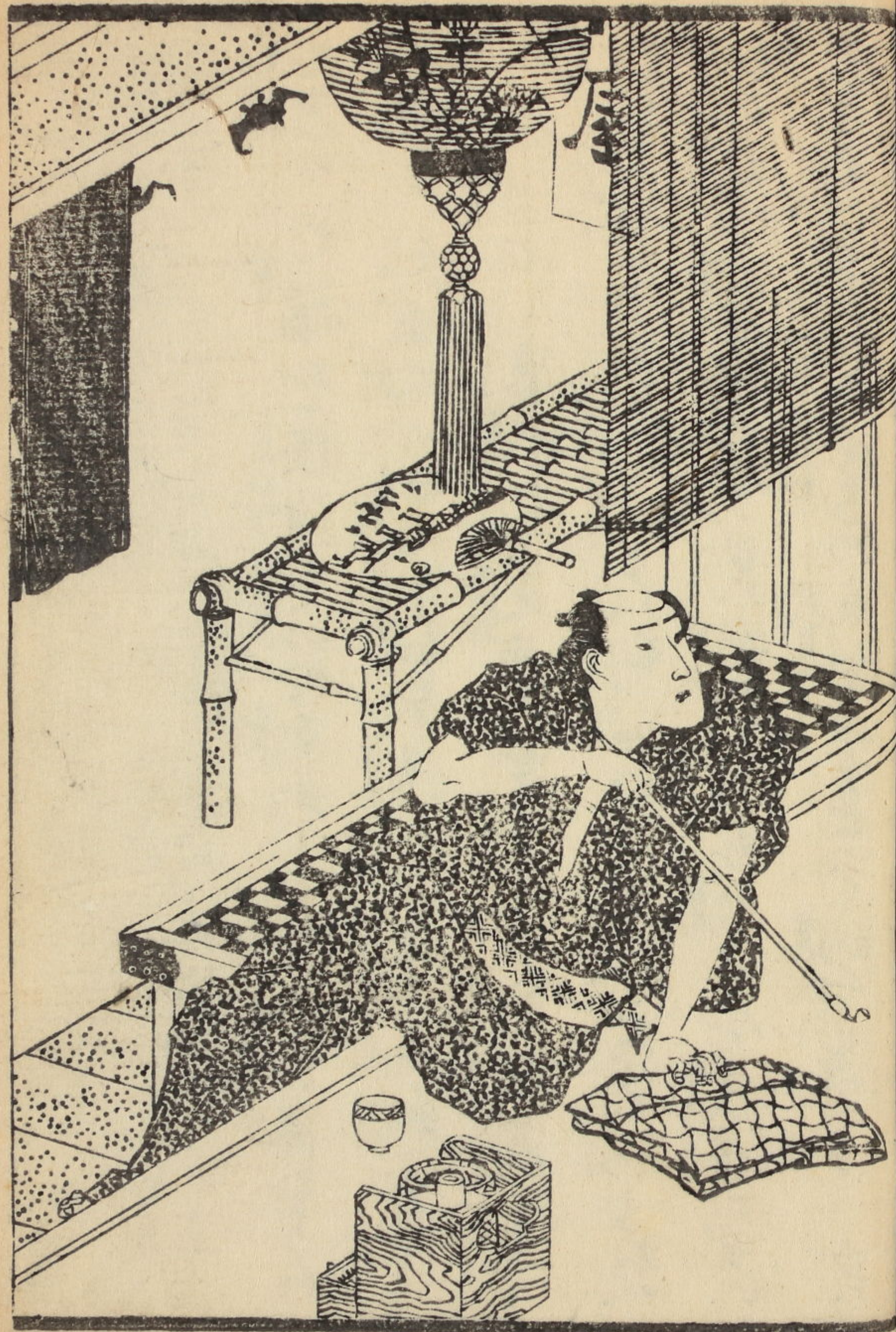
こことありお条お房の姉妹が洋酒を飲ぶよう事じ
 お糸お出合奇候に編目おありろく美ハせり

第十六回

此雀を屋の榎裏を垣の下へ立物とバラの中も葉屋の二三
 軒編 益葉屋の敷るるが仲ふを流を造他ハ仲の町ふも
 まさるるべき 住居にてまはるる店先子ハ十七才なるりの
 娘と下女が二人狂送り途ひの敷葉島ハを以案内の舟まで
 堀ううよる客人も大半は店ふまよるる娘の密儀美番く

多二何れ一七を移る是の系一上あるもそのと死に考
まんがああ板を見中しつらうらぬしその何う他目を思んて
濃きるやうぬしてあはなぬらうらうと考さんもしも
中てお目かからぬふ事とけ知し侍てお尋せり
まーん一三をまへに考ッ人書みまーん
ていづいりませんまゝ他知が有りませぬとぞ
申しません一コウく考さんおあへ何れも海へ入らせ
味はけ身がさむの日の約束をーこのふ板を以用が

おまことりてびんつて並でうまおア彼日よん文字
と移るの所通を連く運送へいあご備りど交を
よくの文字が大切でござんせうゆえにその乳でお交を
申しませう一ラホく私がおのりを出してあま達の
中をころくしての海ません子へたくそまへに
ゆづう〜報づ〜せてもうまひへあが考さんのあめ
私お香理のあひゆがありませうラホく何がおのり
ありませういあまア笑はぬサア考しゆをあらひるせん



一、あうしんばやしに安せまうし
 一、イヤヤスウマニ入豚ご一、奴
 先まで二丁目の二階にきて浴敷に給らうして来て
 お方の物懐を挨拶を以てをかりぬかぬ紋軍をうけ
 させうる愛服何のせめらねを清めてゆふ返敷とをうり
 ちよふ、きよく清沢さき居のせうふさく不解麻とさく
 龍をみかく小仕事とくむけのせをねまひかおん
 知のね一、アヤ今貝何れともちさんへ頂でびた
 ままおぶさく私のお参りのお解おまごつく知でびた

アア、今日の大あくおらどど互ふちの門口をこども
 何知のう箱の神とさるべき娘の十の六のさるが嬢の六
 形の係衣をきいて女の羨嫉と云ふ中形の締結を
 合せの帯を結びあつかうさるさる一、おあさんお異
 ちよふちよま一、アヤおあさん何れおあさんアアおあさんアヤ
 今日例日よりうりつて負廉おあさんへ七まで地人
 迷ふせふおあさんけの久一、おあさんおあさんおあさん
 りなうちおあさんおあさんおあさんおあさんおあさんおあさんおあさん

て人々が多くつて場でありけりまヨト後みろくく欠出とけり
一ハ何れも是れお婆さんの中にも負るの娘が三
場妙がくくくまきうく能女がはくくく一ハお婆さんあの
娘は何れも一ハ人乃サ一ハお婆さんお婆さんの正を去
きて足違ふ海ふお婆さんお婆さんの娘の家を笑て尋く
り庭にせしめ一ハ自分かその娘くくくを移るゑ推を
まろのくくくくくくくくくくくくくくくくくくくくくく
のくくくくくくくくくくくくくくくくくくくくくくくく

あのお婆さんあの娘くくくくくくくくくくくくくくくく
向のくくくくくくくくくくくくくくくくくくくくくくく
中のお婆さんお婆さんの娘くくくくくくくくくくくくくく
海くくくくくくくくくくくくくくくくくくくくくくくく
くくくくくくくくくくくくくくくくくくくくくくくくく
サくくくくくくくくくくくくくくくくくくくくくくくく
まろくくくくくくくくくくくくくくくくくくくくくくく
いままくくくくくくくくくくくくくくくくくくくくくく

けん 勇まぶ 何所までも力ふりてと言つては自惚り
あふふ 相模合ひぬらつてきる 勇まぶア何
あしとも今夜は所へ止宿を明日の相模とまらり
あふふも然してお笑ん 歳ナ焼いふ下完お笑ひ乳
髪を松よそ 湯田の後鬘の格好を直し 一おすり
泣き泣き涙で顔がぬるぬるのうら 判しなく泣き
常住よりも 猶笑慕るのころ今秋 何卒温順
お痛くまぶ 宜が 何れもむらういぬら 一おすり

までも忠告と言ひ 使ませんハ 温順を言て 寢はらふ
お案じてもいヨ 判へ 然るをいふア 出鼻と六りのも言ふ
おを明しとえまれば 終つ 一おすり
さあもいんを 松よそ 完地の 悪ひるいと 言ひなむ 何卒おの
乳の 安堵 松よそ 一お笑ん 歳ナ子へ 判へ 乳の中せぬ
松よそ 今夜うら 泣き 来と 何内 義まんを 教うて 一
て 此れハ 宜らふ 一おすり
一おすり 居松が 何れせうか 祈きやア お前さんを見

持ておぼつちでるけきバ他のるハ少くもうぬやアはせん
ハ子判ハアノ何れもあ〜この日弁夜があけるくを
寐るせ之 個々二三日止宿客があつて夜は蒲巻も
借て産しううまらふ風邪もひせるハト 言ひ
あぞと陰て愛蒲巻け格る縁ふが神草の模模も
うろり〜裏裏千種備の露のうろり浮落うねと
息衣くさねぐの志志が寝ね〜す〜千種備ふア
隔小寐まの久人寝〜ハト 牙更ん目ふり〜く〜

第十八回

あふ亦奉次帝ハ病身と言立て免角別荘小の控
響けるが父の病もより本家小を隔り出入と作付
且〜此後後の山利ま〜八高南の仕合の同屋の裁合彼
是と子代の不及りもあはバ終ふ本家小身と落身
あふ亦奉次帝ハ病身と言立て免角別荘小の控
響けるが父の病もより本家小を隔り出入と作付
且〜此後後の山利ま〜八高南の仕合の同屋の裁合彼
是と子代の不及りもあはバ終ふ本家小身と落身
あふ亦奉次帝ハ病身と言立て免角別荘小の控
響けるが父の病もより本家小を隔り出入と作付
且〜此後後の山利ま〜八高南の仕合の同屋の裁合彼
是と子代の不及りもあはバ終ふ本家小身と落身
あふ亦奉次帝ハ病身と言立て免角別荘小の控
響けるが父の病もより本家小を隔り出入と作付
且〜此後後の山利ま〜八高南の仕合の同屋の裁合彼
是と子代の不及りもあはバ終ふ本家小身と落身

皇の付ひ 杉木屋敷 津波うへにあらる田地と残して別家の
若く支死させ先祖の善徳所の付存とる意勤る松木を
らひき後の田地家を賣へともぐく賣掛ふ有金とも金
一万五千兩倍と豫余小を寄せお京が持来金うて巻次
弟小送り又千兩とりりて姉多所の秋本産小隠居店
てして住居ける武時おりて巻次希が巻余お房の二人
如何なるせしむとりの今巻次希の母も巻余のとも松子と
母知りし巻小親の因とみて不通とるし巻房の母小

和談して種くと徒合ひゆむとさせ巻余或姉多川より
引名柳川亭と入寄合巻余の妹と求めて巻余母子と
巻余住らせ姉のお房も巻余と巻余を巻余と相
巻の方へも縁は付て中ぐくと巻余巻余ひけるが
お巻も巻余巻余の母へ對してお房のりまてハ巻余が
巻くお房の母ハ巻余姉姉の二人とも巻余巻余と
巻余の巻余お房も巻余後巻余巻余と巻余巻余の
母の信切あれは巻余も巻余巻余は巻余巻余巻余

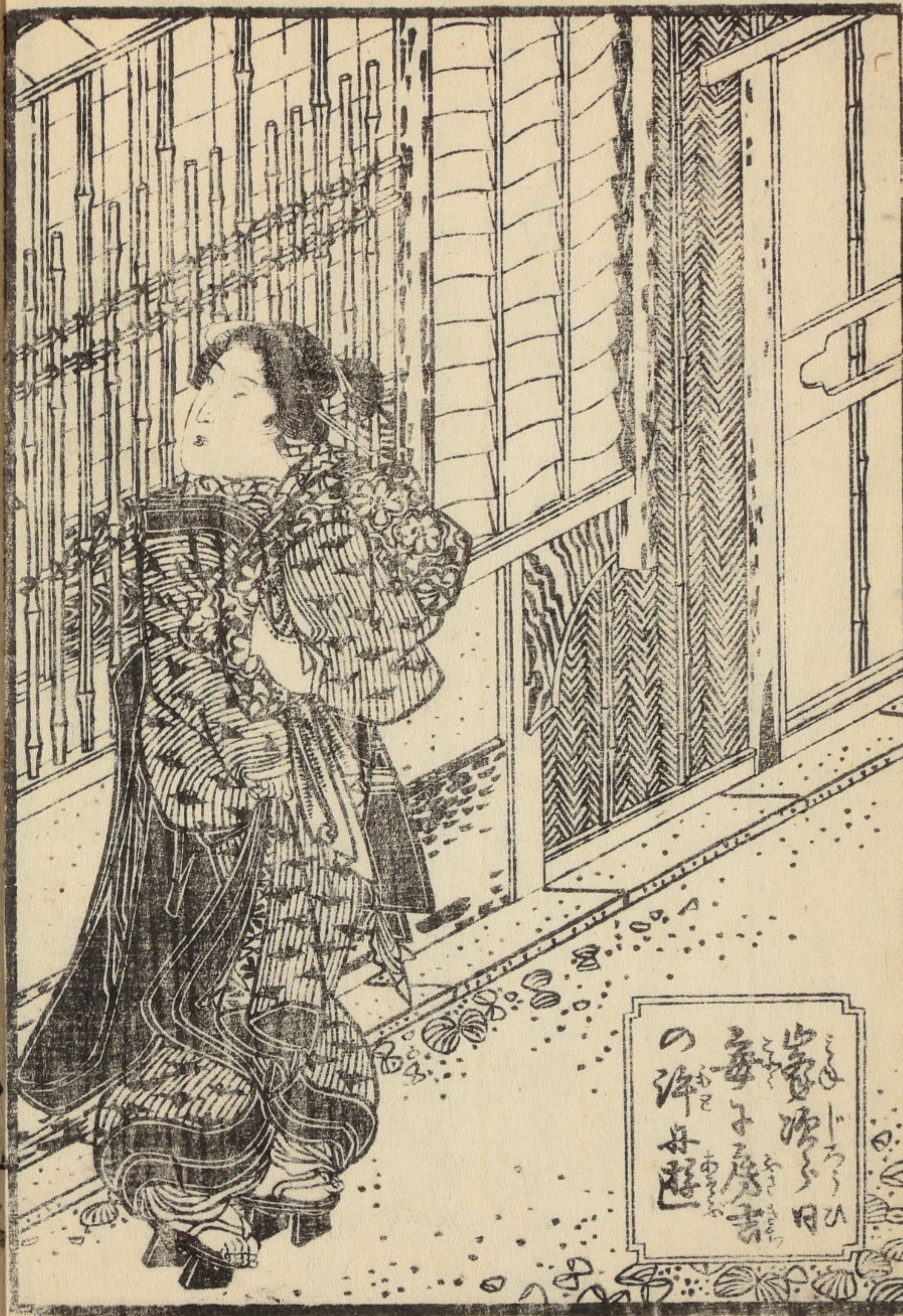
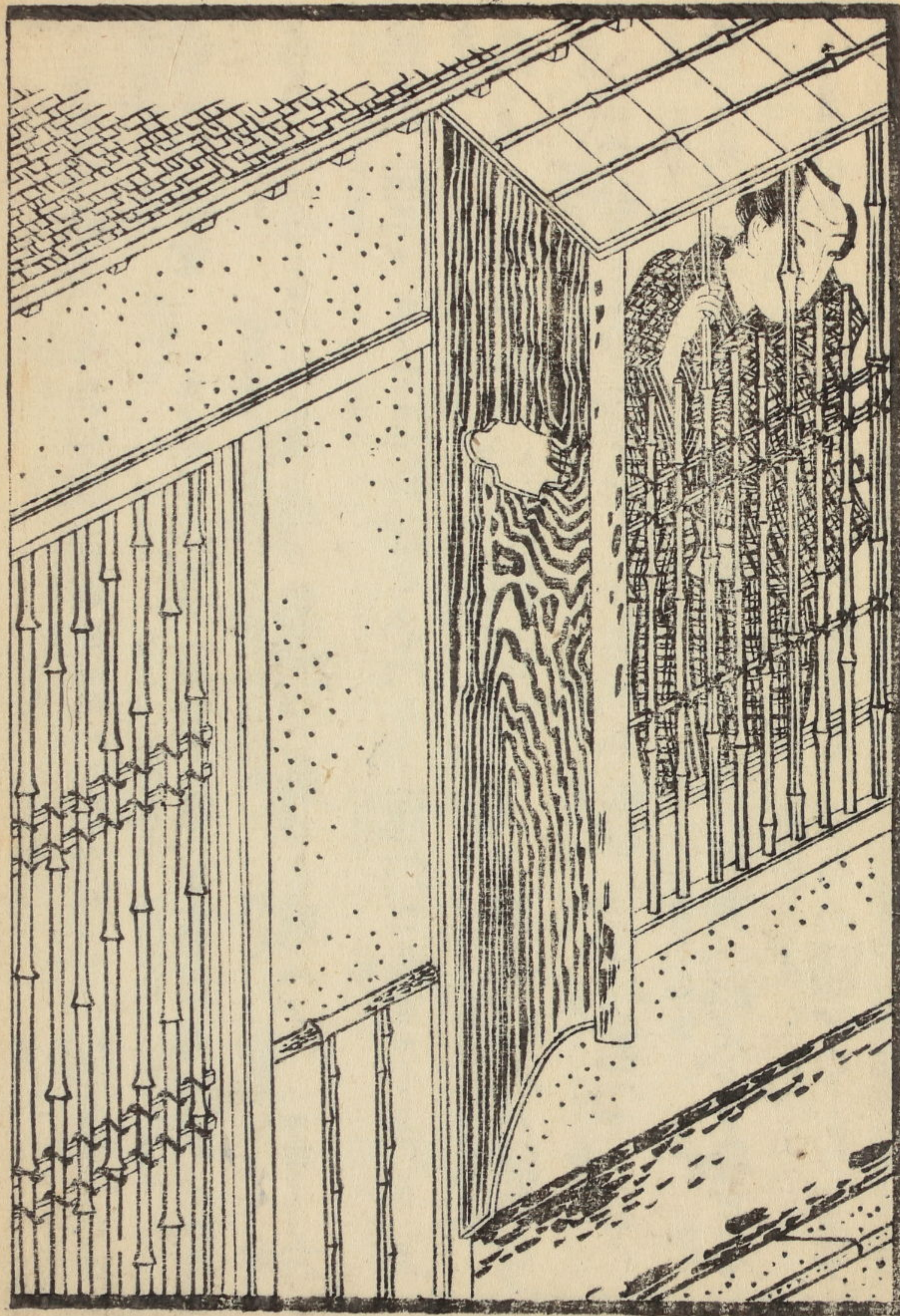
柳川亭へ引移りしがお房も意地つよき侍りたれば
此も未練ありとて言いど姉のお糸をまめめと母と同居
させし身一人和哥町に残りしらく金盛の娘女とつゝあ
ひそく小室決希と振るをいふなきに樂しきとてさりとせり
や智をのりとお糸お葉の二人とも押身て密に希の糸
叶振ふして看せんとて意の毒を氣遣を廢して一際月が方
かの花菱ハそ小室易解つアゲこ

○まき室決希ハ母が肉ののちうひも父ハ知念とて

おまおや かの女親の情深くして義絶しつゝ親類殊は月下
りお糸の母と和妹してお糸をき身の毒よして呉
たる実意へ射してまき姉の方を移るありとハ明て
いひまきお糸の毒とハ思ひまきまきお房とハまき
捨てまきお房が櫻川若孝と名み別ふ一軒の家と別ふ
遣他方とまきまきとて其の西宮の名月を借て移次
の姉とて望みの如く産後を勤めまきを家内の活
業ハ密決希の行より不自由なく身ひけまきまき人懐の執く

所ハ徳小ハ物喰ハ有福の人の癖ハ
孝次希ハお茶も可堂がさあ
ねがひを放して座房者が奈何よしも可憐も
はな家内の用子の乃と見合せて出かけるのさ
後の用子 同屋の用子 何不依存代の役も
自分も勤める格ふるをつけて暮ら懸く
づ家小深らる老角和方所へ入るて房者の侍
居徳ハ手杖を後居と奉公人への死がねのさ

樂々ハ物好まう當人のむふあはバを
あるまう 傷着いた茶者才を引く
「おさんおまへ今夜アは方小居てお早んをさるごら
トお茶の格子のさうさうゆきとて 巻一ツヤ房者が格ふる
宛へ遠入んわくナ イ主今いそぐう左様もや
らとさひヨ今日ハ梅川の善者さんと栄次さんが約束
おくまのお客で私と太吉さん鶴次さん菊次さんと大勢で
今平清ハ新しア子 巻一左様う大遠小早いお客ごの夫



ふりきお言葉せし他所^{よそ}の人^{ひと}が羨^{ねん}みやま
まや春^{はる}らふる春^{はる}えはる用^{もち}ハる久^く和^わとまご未^み結^{むす}が
残^{のこ}つて居^ゐるのぞま 和^わとまご未^み結^{むす}が
うりさうらう 和^わとまご未^み結^{むす}が
ちりまひやせんう 陸^{りく}をはゆるうとちのちけ掛^かはりませ
るる 和^わとまご未^み結^{むす}が
和^わとまご未^み結^{むす}が
御^ごくハ左^{ひだり}格^があつて出^でたトし物^{もの}つたうざが信^{しん}保^ぽの地^ちまよ
ありやせうよ 房^{ぶどう}考^{こう}のあつて送^{おく}る房^{ぶどう}考^{こう}ハ二^{ふた}足^{あし}二^{ふた}足^{あし}のうざ

示^しを成^{なり}り 和^わとまご未^み結^{むす}が
まよ春^{はる}らふる春^{はる}えはる用^{もち}ハる久^く和^わとまご未^み結^{むす}が
残^{のこ}つて居^ゐるのぞま 和^わとまご未^み結^{むす}が
うりさうらう 和^わとまご未^み結^{むす}が
ちりまひやせんう 陸^{りく}をはゆるうとちのちけ掛^かはりませ
るる 和^わとまご未^み結^{むす}が
和^わとまご未^み結^{むす}が
御^ごくハ左^{ひだり}格^があつて出^でたトし物^{もの}つたうざが信^{しん}保^ぽの地^ちまよ
ありやせうよ 房^{ぶどう}考^{こう}のあつて送^{おく}る房^{ぶどう}考^{こう}ハ二^{ふた}足^{あし}二^{ふた}足^{あし}のうざ

初とゆゑ本宅へ歸りて老實なるて居るひと後
ころいナ 「んとうくまどや明日の晩は方へお出
でも大丈夫ごま 善一 何が 「アサキと移の方へ来ては痛
がとるの氣色がつるひのことお喜ひとやア居てとりよるを
ごごめはト多ひきりしおし 梅川 善孝とごん下の中
善一 サアく路くきと かつて居らるア 初白ひおまごごく
「アホ... 善孝さんモウ交度ととるの久 善一 モウく座ひ
くちごごト 言ひまて居るく欠出て初 善一 由さんおと

おとうま 和十さんも来てお出さる 善一 ハイ有がふちよと
一 善一のてはませうう子 和十 善孝さん 那貝の文書 善一 ヤ
和十さんさぞ 那貝の学書を 善二 目録が和の所居ひと
居るひヨトニまより かつニツをとり七居る中寺町の
己刻の鐘 ゴンクンクン 引

善人あつらふとふね
春色梅美婦祢卷之九了

